

小児期の傷ついた体験記憶の虐待認識に及ぼす影響

関 秀俊 津田 朗子 新家 一輝*
西村真実子**

要 旨

小児期に家庭において心身が傷つくような言葉や行為を受けた体験記憶が現在の虐待の判断認識に影響しているか検討した。約半数の人が外傷体験を記憶しており、思い出した時の気持ちは、否定的感情、肯定的感情、何とも思わないに分かれた。さらに外傷体験の内容を現在も許せないと思っている人は男性では5~10%、女性では10~20%いた。外傷体験記憶の有無による虐待と判断する認識には有意な差はなく、否定的感情を伴う群ではしつじに関連する身体的虐待の認識のみ有意に高かった。しかし、自分の外傷体験を許せない群では、種々の身体的・心理的・性的虐待さらにネグレクトやその類縁行為に対し、虐待と判断する割合が高くなっていった。これらのことより小児期の外傷体験の内容や被体験者の感じ方は多様であるが、外傷体験の行為を否定的に捉え、容認していない場合は、全般的に虐待判断に関する認識が高くなっていることが明らかになった。

KEY WORDS

Child abuse, Recognition, Traumatic experience, Corporal punishment, Discipline

はじめに

近年わが国では、虐待報告例の増加、マスコミ報道の強化、さらに虐待防止法が制定されたことなどから、児童虐待に対する一般的な関心は急速に高まってきた。そして児童虐待問題の重要性が行政、医療保健、教育、福祉等の各専門分野で取り上げられ、専門分野では理解や認識が深められつつある。しかし、現在も虐待例や虐待しそうな家庭は増加しており、また早期発見や通告の遅れのための虐待死も相変わらず後を絶たない。その背景には虐待の定義に関する認識が一般の人々ではまだまだ不十分で、共通した理解が得られておらず、虐待の早期発見や通告の障害になっている可能性が十分考えられる。これまで専門職における虐待認識に関し多くの研究があるが¹⁾²⁾、一般の人を対象とした調査は少ない。今回、学生と一般の社会人を対象に虐待および虐待類縁行為を虐待と判断する認識と、小児期の家族から受けた身体的・心理的に傷ついた体験の影響を検討した。

対象と方法

1. 対象

石川県内の13の大学、短大、専門学校の学生と一般社会人に調査の主旨を説明し、協力の得られた対象に無記名のアンケート調査を施行した。調査期間は2000年9月27日から10月19日で、分析は統計ソフトSPSS 10.0Jを用い、記述統計、 χ^2 検定を行った。

2. 調査内容

- 1) 外傷体験の記憶：子どもの頃に家族（親、きょうだい、祖父母）から受けた体罰や暴言などの傷ついた体験を外傷体験とし、現在でも思い出す外傷体験の内容やその時の状況、頻度、思い出したときの感情、さらに現在そのような行為や行為をした人を許す気持ちになっているかを尋ねた。
- 2) 虐待判断認識：身体的虐待行為（12項目）に対し虐待と考えるかどうか、さらに心理的虐待（5項目）・ネグレクト（5項目）・性的虐待（4項目）の各虐待類縁行為に対する意識を、

金沢大学医学部保健学科看護学専攻

* 名古屋大学附属病院

** 石川県立看護大学

表 1. 対象の背景

学生 (学部)	男性	女性
看護学科	24	398
医学科	70	21
その他医療系	120	285
福祉・保育系	54	146
文系	328	463
理系	329	130
小 計	925	1,443
社会人 (職種)	男性	女性
保育・教育関係	4	50
医療・福祉関係	63	265
事務・サービス	51	104
製造業	38	8
その他	11	13
主婦	-	31
小 計	167	471
合 計	1,092	1,914

(人)

表 2. 外傷体験を思い出す頻度と評価

	現在の評価	思い出す頻度		
		よく	時々	まれに
男性	許せる (n=360)	1.9	9.7	88.3
	許せない (n=59)	13.5	25.0	61.5
	どちらでもない (n=119)	0.9	12.8	86.3
	全 体 (n=529)	2.8	11.9	85.3
女性	許せる (n=563)	1.2	13.5	85.3
	許せない (n=133)	18.8	42.1	39.1
	どちらでもない (n=283)	4.9	28.6	66.4
	全 体 (n=979)	4.7	21.8	73.5

(%)

「かまわない」「仕方がない」「不適切」「犯罪」「虐待」「虐待かつ犯罪」に分類し、虐待または犯罪と判断する割合を調べた。

結 果

1. 対象者の属性

対象は大学、短大、専門学校の学生2,368人と社会人638人(合計3,006人、回収率は70.7%)で、年齢分布は、男性(24歳以下82%, 25~39歳12.2%, 40歳以上5.8%), 女性(24歳以下74.2%, 25歳~39歳15.8%, 40歳以上10%)であった。育児経験者は男性109人、女性341人であった(表1)。

2. 外傷体験の内容

子どもの頃の外傷体験の記憶を思い出す人は、男性52.5%, 女性53.7%で男女差はみられず、また年齢区分でも24歳以下51.8%, 25歳~39歳59.2%, 40歳以上56.3%と大きな差異はなかった。外傷体験の内容は全体的に体罰的なものが多く、女性では心理的なものが男性より有意に多くなっていた(図1)。結果は示していないが、現在の年齢による内容の差異は少なかった。

3. 外傷体験の時期と加害者

また外傷体験をした時期は、現在の年齢や男女による差はみられず、全体で幼児期32%, 学童時期55%, 中学生の時4%, 高校生の時4%であった。傷つける行為をした人は、男女それぞれ父親(48%, 45%), 母親(47%, 66%)または両親(22%, 20%)が多く、兄弟姉妹(6%, 8%)や祖父母(5%, 6%)は少なかった。

4. 外傷体験を思い出した時の感情

外傷体験を思い出した時の感情は、全体的に「何とも思わない」や「懐かしい」が約30%と上位を占め、「懐かしい」「良かった」などの肯定的感情は男性に多かった(図2)。一方、「悲しい」「腹が立つ」「辛い」などの否定的感情はすべて女性で有意に多かったが、40歳以上では男女差は認めなかった。また、現在の年齢による感情の比率にはほとんど差はみられないが、女性で「何とも思わない」が24歳以下で有意に多く、「悲しい」が40歳以上で少なかった。

5. 外傷体験を思い出す頻度と現在の評価

外傷体験を思い出す頻度は、「よく思い出す」と「時々思い出す」はそれぞれ、男性では2.8%と11.9%, 女性では4.7%と21.8%で、女性で思い出す頻度が多かった(表2)。しかし、40歳以上では男女差がなくなり、また年齢による頻度に大差はなかった。このような外傷体験の行為やそれをした人を現在では許せると考えている人は全体で62%, 許せない人は12.2%, どちらでもない人は25.8%であった。さらに、思い出す頻度との関係は、男女とも許せない群で頻度が多くなっている。

次に外傷体験を思い出した時の感情を、「良かった」または「懐かしい」と感じる群を肯定感情群、「悲しい」「腹が立つ」「辛い」「怖い」「悔しい」と感じる人を否定的感情群、何とも思わない群、どれにも属さない群に分類し、外傷体験に対する評価と比較検討した(図3)。男女とも許せる人は、肯定的感情を持っており、一方現在でも許せないと思っ

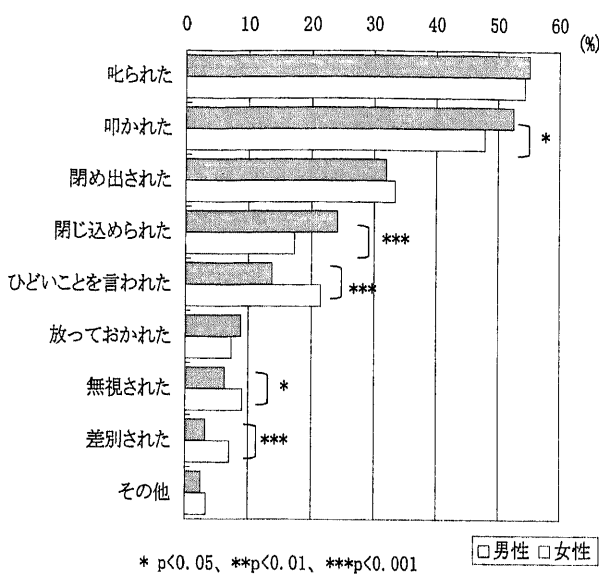


図1. 外傷体験の内容

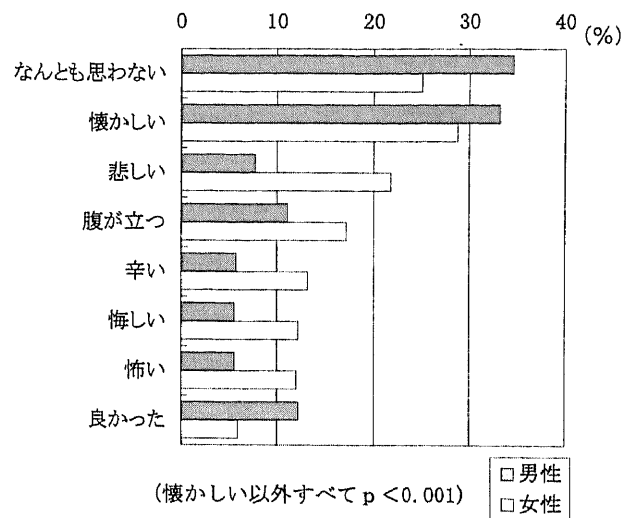


図2. 外傷体験を思い出した時の感情

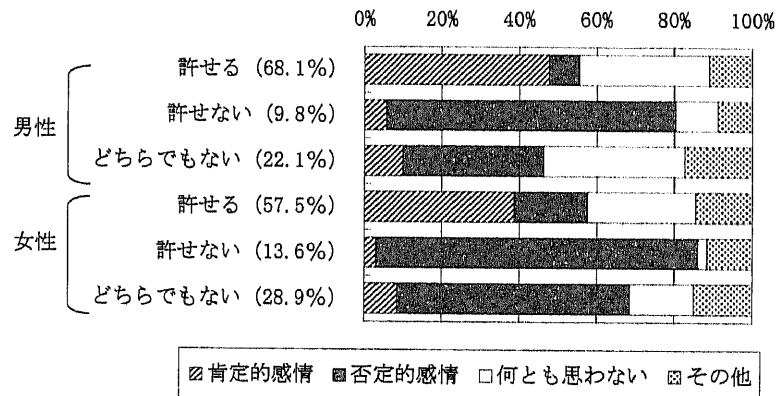


図3. 外傷体験への感情と現在の評価

ている人は、否定的感情が多くなっている。結果は示していないが、外傷体験を受けた理由が何も悪いことをした覚えがない場合では、男女でそれぞれ34%と39%が許せないと思っていた。

6. 外傷体験による感情や評価

外傷体験の内容ごとに思い出した時の感情や現在の気持ちを検討すると、「叩かれた」「閉め出された」などの体罰的内容に対しては男子で肯定的感情が多く、女性では肯定と否定的感情がほぼ同数であった(表3)。一方、「ひどいことを言われた」「無視された」などの心理的内容の外傷体験者では男女とも否定的感情が多く、さらに体罰的外傷体験者に比べ許せない気持ちの人が多くなっている。

7. 身体的虐待行為に対する認識

全体的にしばる、蹴る、殴る、突飛ばす、耳や髪を引張るなどの体罰的行為を虐待と判断する比率は高く、閉じ込める、閉め出す、つねる、頭や尻を叩

く、正座させるなどのしつけ的行為では低くなっている(表4)。外傷体験の記憶の有無による全項目に対する虐待と判断する認識の差異は認められなかった。しかし、外傷体験に否定的感情を抱いている男性では、しつけ的行為に対しては有意に虐待と認識する率が高い項目が多く、女性ではほとんど有意な差はない。さらに現在も外傷体験を許せないと思っている人は、男女とも全体的に虐待と判断する比率が高く、特にしつけ的行為に対し虐待認識が有意に高かった。

8. 心理的虐待、ネグレクト、性的虐待に対する認識

心理的虐待、ネグレクト、性的虐待の各項目に対し「虐待」または「犯罪」と判断する比率は、外傷体験の記憶の有無では全く差がみられず、また思い出したときの感情でも男女ともほとんど有意な差はみられなかった(表5)。しかし、現在も許せない気

表3. 外傷体験を思い出した時の感情と評価

体験の内容	思い出した時の感情				行為や人に対する評価			
	男性		女性		男性		女性	
	肯定的	否定的	肯定的	否定的	許す	許せない	許す	許せない
叱られた	41.5	13.5	30.2	29.7	73.8	7.1	67.1	7.8
叩かれた	34.3	19.5	24.6	38.3	68.6	9.4	53.6	15.0
閉め出された	45.6	12.1	30.4	29.2	73.8	7.1	67.1	7.8
閉じ込められた	41.3	13.8	29.9	26.0	71.2	7.2	67.4	8.4
ひどいことを言われた	17.9	46.2	8.6	68.3	34.6	30.8	30.1	28.8
かまってもらえなかった	30.6	20.4	22.7	44.0	58.8	11.8	58.7	16.0
無視された	14.3	42.9	15.1	47.4	47.2	22.2	40.7	22.0
差別された	16.7	55.6	5.4	64.9	33.3	33.3	23.3	31.5

(%)

表4. 外傷体験の虐待認識に及ぼす影響(1)

	思い出した時の感情				行為や人に対する評価			
	男性		女性		男性		女性	
	肯定的	否定的	肯定的	否定的	許す	許せない	許す	許せない
煙草の火を押付ける	99.0	96.6	99.6	97.5	98.5	94.6	99.3	96.3 *
しばる	85.1	82.8	90.6	92.8	83.6	78.6	92.6	94.1
蹴る	73.6	78.4	87.9	86.9	75.6	76.8	86.7	87.5
殴る	64.2	81.9 ***	77.7	81.5	66.4	80.4 *	77.9	86.0 *
突飛ばす	64.2	66.4	78.9	82.0	63.1	71.4	79.4	85.3
耳・髪を引張る	65.2	70.7	72.3	76.7	65.1	62.5	72.0	82.2 *
部屋に閉じ込める	36.3	53.4 **	44.5	51.9	33.8	57.1 ***	43.5	56.6 **
戸外に締め出す	27.4	47.4 ***	34.4	49.6 ***	25.9	60.7 ***	34.9	58.1 ***
つねる	21.9	31.9	35.2	41.7	20.0	35.7 *	35.2	47.8 **
頭を叩く	15.9	27.6 *	25.0	27.7	14.9	26.8 *	22.4	29.4
尻を叩く	7.0	19.0 **	8.2	12.1	6.2	17.9 **	7.6	15.4 **
正座させる	3.5	12.1 **	7.0	8.6	5.1	14.3 *	5.9	14.0 **

(%)

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表5. 外傷体験の虐待認識に及ぼす影響(2)

	思い出した時の感情				行為や人に対する評価				
	男性		女性		男性		女性		
	肯定的	否定的	肯定的	否定的	許す	許せない	許す	許せない	
心理的虐待	傷つける言葉を繰り返す	36.7	38.3	37.6	45.0	35.5	42.9	38.3	56.6 ***
	事あるごとに言葉で脅す	22.7	33.0	32.0	36.0	22.9	42.9 ***	31.4	44.4 ***
	子どもの話しかけを無視する	33.3	37.7	48.2	43.6	32.9	45.5	44.6	55.1 *
	日常生活を厳しく制限する	16.7	22.8	15.6	18.7	15.1	29.1 *	15.5	24.8 *
	早期教育を強要する	6.1	11.4	3.9	5.4	5.7	18.2 ***	3.7	11.1 ***
ネグレクト	幼児の食事をしばしば抜く	83.2	85.8	93.0	90.1	82.5	89.1	90.9	94.2
	子どもをいつも不潔にしておく	46.7	57.0	59.3	58.1	47.8	64.3 *	57.7	64.0
	適切な医療を受けさせない	69.2	73.0	77.8	81.3	69.6	80.4	76.0	88.1 ***
	乳幼児を車に残してパチンコ	76.8	78.3	81.0	80.8	75.5	82.1	81.2	86.8
	子どもの生活態度に無関心	6.6	7.0	7.4	8.6	4.9	7.1	5.1	10.2 *
性的虐待	異性の子どもと一緒に入浴を強要	54.4	52.6	49.2	62.5 ***	52.5	64.3	57.6	71.3 ***
	異性にの子どもの胸・尻を触る	76.8	73.0	85.3	89.4	74.7	83.9	85.6	98.8
	アダルトビデオを見せる	49.4	42.1	54.9	64.0 *	46.0	50.9	41.2	37.2
	子どもの裸の写真を撮る	87.8	79.1	87.9	92.6	85.0	80.4	91.9	95.6

(%)

* p<0.05, *** p<0.001

持ちを持つ群では、特に心理的虐待項目では男女とも虐待認識の比率が有意に多くなっていた。

考 察

わが国においては児童虐待についてこれまで統一された定義はなかったが、2000年5月に成立した「児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）」では、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待の4種類の行為内容を定義した。しかし、日本語の「虐待」からくるイメージは身体的虐待に代表されるような、肉体的ダメージを伴う重篤なケースを想起させる場合が多く³⁾、心理的虐待やネグレクトの認識が低い傾向が知られている⁴⁾。また、身体的虐待では、しつけと区別は困難な場合が多く、虐待者だけでなく目撃者においても虐待とは認識されにくい⁵⁾。

虐待に関する認識が多様なことはこれまで児童虐待に取り組む専門的職種間で指摘されていたが¹⁾²⁾、民間での虐待認識の調査は少なく不明な点はあるが現実的には共通認識が得られておらず、児童虐待の早期発見や通告を困難にする一因になっている。子どもの心身を傷つけ、人権を踏みにじる行為を「虐待」と判断する認識の背景には、子どもの年齢、行為の内容・程度・頻度、行為をする目的や状況、そして判断する人の性別、年齢、生育環境、育児経験、育児観、社会環境などの要因が影響している⁶⁾。小児期に虐待を受けることは虐待をする親のリスク因子になり、虐待の世代伝達を形成することが指摘されている。しかし、一般的に多いと推測される小児期に行き過ぎたしつけや体罰をうけた体験の虐待認識への影響についての研究は少ない。今回の調査では小児期に家庭で行われた外傷体験を現在も思い出す人は約半数で、また男女差や年齢差を認めないことより、かなり外傷体験は普遍的であると考えられる。外傷体験の内容や受け止め方は多様で、女性では思い出す頻度が多く、また思い出した時は肯定的感情より否定的感情が優位で、外傷体験を今も許せない割合が多かった。否定的感情を伴う体験は心理的に傷つけられた内容が多く、また受けた時期は肯定的感情を伴う体験では幼児期と小学生のときが多いのに対し、感受性の高い思春期が多くなっている。

身体的虐待行為に対し虐待と判断する認識は、今回の調査でも全体的に折檻や体罰的内容で高いがしつけ的なもので低い。そして外傷体験による認識の影響は体罰的内容ではほとんどないが、しつけ的内容では特に男性で否定的感情を伴う外傷体験を有す

る群は肯定的感情群より虐待と認識する率が高い。さらに、現在も外傷体験を容認できず許せないと考える群では、男女とも虐待判断率が高くなる。さらに心理的虐待、ネグレクトさらに性的虐待関連行為に対する認識では、虐待あるいは犯罪と考える割合は、外傷体験に対する感情では変化がないが、許せないと考える人では、男女とも特に心理的虐待に関し判断率が高くなる。

身体的虐待はしつけとの区別があいまいになり、子どもが低年齢である時や親が感情的に行った時は虐待と認識するが⁵⁾⁶⁾、一般的に虐待認識は薄い場合が多い。このため育児ストレスが強くなるとさらに区別がつかず致命的な虐待に発展する。衣笠は、親からよく叩かれた経験のある母親は叩くことがしつけに必要と考えており、わが子に対しても叩く頻度が多くなっていると指摘している⁷⁾。しかし、現実の虐待的育児行動はしつけにおける体罰の肯定的考えとは関連なく、母親が時間に追われたり、育児疲労が蓄積した時見られるため⁸⁾、虐待認識と現実の行動は区別する必要がある。望月らは厳しいしつけを受けた母親では、特に体罰を与える割合は対象と差はないが、体罰に対し後悔する人が多い傾向があると報告しており⁹⁾、しつけを超えた体罰に対し虐待と認識していると思われる。今回の結果でも外傷体験を有していても自分が否定的感情を抱き現在も容認できない人では虐待と判断する率が高くなっていることより、重度の虐待まではいかない小児期の外傷体験は虐待の世代伝達とは異なった心理的影響が働いていると考えられる。

今回は家庭内の外傷体験の影響を検討したが、学校での被体罰経験者では、男性は体罰を納得し肯定的に捉え、大人になっても体罰を肯定する傾向があり¹⁰⁾、また女性では男性より精神的苦痛が多く体罰否定者も多い¹¹⁾と報告されている。このことから外傷体験やそれに伴う感情に対する捉え方が、体罰や虐待に対する認識に影響していることがわかる。このように外傷体験は内容、受けた時期、理由、被体験者の性別などにより受け止め方は多様であり、否定的感情や大人になっても受け入れることができず許せないと感じている場合は、体罰的なしつけや不適切な関わりに対し虐待と判断する傾向が強くなっている。

近年の児童虐待の増加は、事例の増加だけでなく社会的な関心が高まり潜在していた事例の発見や通告の増加の増加によると考えられるが、虐待防止のためには今後さらに一般の人の虐待に対する共通の

認識を高める必要がある¹²⁾。この場合外傷体験により虐待と判断する認識基準は各人で異なることを充分理解し啓発活動をしなければならないと考えられる。

文 献

- 1) 平田伸子 他：児童虐待に関する産科勤務看護職の認識 助産婦, 53(1); 56-61, 1999.
- 2) 池田美佳子 他：児童虐待に対する看護者の認識 I 認識の全体像 大阪府立看護短大紀要, 13(2); 227-235, 1991.
- 3) 高橋重宏 他：子どもへの不適切な関わり(マルチリトメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3)ー子ども虐待に関する多職種間のビネット調査の比較を中心にー 日本総合愛育研究所紀要, 33; 127-141, 1997.
- 4) 佐藤奈保 他：長野県K市における乳幼児をもつ両親の「子どもの虐待」の認識の実態 長野県看護大学紀要, 1; 55-63, 1999.
- 5) 橋本信男：乳児や幼児早期の育児(虐待も含め) ペリナ
- イタルケア, 16(9); 43-48, 1997.
- 6) 新家一輝 他：子ども虐待に対する認識に関与する因子の検討 第48回日本小児保健学会講演集, 522-523, 2001.
- 7) 衣笠紀玖子：母親の育児態度と意識および日常生活ー母親の生育暦(たたかれ経験)と配偶者の母親への態度などからの検討 チャイルドヘルス, 3(9); 52-56, 2000.
- 8) 野村美樹 他：母親の虐待的育児行動に関する調査. 福岡県立看護専門学校看護研究論文集, 17; 165-175, 1994.
- 9) 望月珠美 他：幼児期におけるしつけと体罰に関する親の意識 桐花教育大学研究紀要, 10; 41-45, 1998.
- 10) 楠本恭久 他：体育専攻学生の体罰意識に関する基礎的研究ー被体罰経験の調査からー 日本体育大学紀要, 28(1); 7-15, 1998.
- 11) 安藤房治 他：学校における体罰に関する一考察ー教育学部学生の体罰体験と体罰意識調査をもとにー 弘前大学教育学部紀要, 72; 69-89, 1994.
- 12) 大川眞智子 他：児童虐待の援助に関する認識および取り組みの実態ーK県内における市町村保健婦の実態調査からー 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 10; 101-110, 2000.

Memories of Childhood Traumatic Experiences and Recognition of Child Abuse

Seki Hidetoshi, Tsuda Akiko, Niinomi Kazuteru, Nishimura Mamiko

ABSTRACT

This study investigates the relationship between memories of childhood traumatic experiences and recognition of child abuse at adult. About half have traumatic memories and they have positive or negative emotions when they remember their experiences. In addition, about 5 to 10% of men and 10 to 20% of women still cannot accept the traumatic experiences. There was no difference in recognition of child abuse in the presence of the traumatic memories, however, people who feel negative emotions or don't accept the traumatic experiences recognize maltreatment more strictly as physical, emotional and sexual abuse as well as neglect.